

幼稚園における高校生による職場体験実習について I

－ 高校生に対する意識調査の結果を中心として －

○高見 令英 水野 智美 山本 哲也 桐原 宏行 望月 珠美 横山 範子 徳田 克己
(国際武道大学) (筑波大学) (つくば国際大学) (筑波大学) (桐花教育研究所) (筑波大学)

I はじめに

最近、高校生が幼稚園・保育所などでの体験実習が取り入れられつつある。この体験実習は、高校生が自主的に参加するものであり、進路を決定する前に実際の現場を見ることによって、明確な意志を持って進路を選択できるようにと企図されたものである。

またこの実習は、実習を行う高校生だけでなく、協力した幼稚園・保育所の保育者や子どもたちにも様々な影響があると考えられる。この種の実習が頻繁に行われるようになった今日、それぞれに意義のある体験にするために、どのような実習をしていくべきかについて検討しておく必要がある。

そこで、研究1では体験実習を行った4名の高校生の意識を、研究2では体験実習を行った高校生に対する保育者の意識を、研究3では体験実習を行った高校生に対する幼児の意識を調査することによって、体験実習の意義を総合的に考えていくことにしたい。

II 体験実習の内容

調査を依頼したK幼稚園(名古屋市)での体験実習は夏期保育期間の1998年8月下旬の1週間であった。K幼稚園の夏期保育中における一日の活動の流れは、8:00～9:00登園・着替え・自由遊び、9:30～10:45 設定保育(歌・水遊びなど)、10:45～11:00 着替え・帰宅準備、11:00 降園であった。

体験実習に対しての事前指導は、7月中旬に約1時間程度、園長から高校生に対して行われた。事前指導の内容は、幼稚園の1日の活動内容、園の指導方針、クラスの子どもの人数や特性、実習に参加するときの持ち物や服装に関する注意などであった。服装に関しては、「子どもと遊べるように動きやすい服装をするように」という指示が出され、また「子どもは平等に扱うこと」が強調されて伝えられた。

K幼稚園は、1クラス1担任制で全部で10クラスあり、4名の体験実習の高校生はそれぞれ別のクラスに配置され、それぞれの担任に指導を受けた。

III 研究1：体験実習に対する高校生の意識

1. 目的

体験実習が高校生にとってどのような意味を持った

のか、また体験実習によって子どもや幼稚園の仕事をどのようにとらえるようになったかを明らかにする。

2. 方法

(1) 調査対象者

名古屋市立K高等学校3年生4名(すべて女性)。

(2) 調査項目

- ・性別(項目選択)
- ・学年(項目選択)
- ・体験実習に参加した理由(項目選択および自由記述)
- ・実習以前には幼稚園の仕事をどう思っていたか(自由記述)
- ・実習をしてみて幼稚園の仕事の楽しいと思うところ、おもしろいと思うところはどこか。(自由記述)
- ・実習をしてみて幼稚園の仕事の大変なところはどこにあると思うか。(自由記述)
- ・子どもをかわいと思ったのはどんなときか。(自由記述)
- ・子どもを憎らしいと思ったのはどんなときか。(自由記述)
- ・実習中にあった、印象に残るエピソード(自由記述)
- ・実習に来る前に、調べておけばよかった、準備しておけばよかったと思うことは何か。(自由記述)
- ・実習の間に、「もっとこういうことをしてみたかった」と感じたことは何か。(自由記述)
- ・実習に参加して、自分自身にプラスになったと感じることは何か。(自由記述)
- ・今後、体験実習があれば、参加したいか。(項目選択)

(3) 調査方法

上記の調査項目の質問紙を作成し、夏期保育最終日に配布した。回答の際、回答者を特定しないため無記名にし、さらに封筒に封をして園長に渡してもらうようにした。

3. 結果および考察

体験実習に参加した理由は、全員が「将来保育者になりたいから」を選択し、4名中3名が「幼児教育に

関心があったから」を選択していた。

また、4名中3名が実習以前の幼稚園の仕事のイメージを「子どもと毎日一緒に過ごせる楽しい仕事」、「子どもたちと遊んだり、歌を歌ったりして楽しくできる仕事」と記述するなど、「楽しい」という言葉を用いて述べていた。1名のみが「ずいぶん体力を使う仕事だと聞いた」という現実の困難を指摘していた。高校生にとって、「幼稚園の仕事＝楽しい」というイメージを持っていたように思われる。

実習後では、幼稚園のおもしろいところは、「5歳や6歳の子どもたちとふれあひながら、遊んだり、園児の話を聞けるところ」、「普段の生活の中で、忘れていた小さなことに子どもは反応するので、すごくおもしろい」、「子どもたちと遊べたことが何よりも楽しい」、「子どもたちの行動がひとりひとりみんな違って子どもならではの発想がとてもよかった」という記述にみられるように、子どもの発想や子どもと一緒に過ごすことそのものにあると4名ともが答えている。

また、実際に子どもをかわいと思ったことでは、「先生と言って近づいて来てくれるとき」、「子どもの笑顔を見たとき」、「笑顔で話しかけられたとき」という回答であった。

幼稚園の仕事の大変なところは、「子ども一人ひとりに気を配ること」、「いろいろな子どもと平等に遊ぶこと。ずっと一緒に遊んでいると、退き際がつかめないので、どうしても一定の子と一緒にいることになっているような気がする」など、多くの子どもに気を配って遊ぶことの大変さを全員が挙げていた。また「活動内容を考えることに大変さを感じた」という保育計画の立て方の難しさを記述した者も1名いた。

子どもを憎らしいと思ったときを尋ねた項目では、4名中2名が「特に感じなかった」と答えていたが、他の2名は「子どもが自分を独占しようとして、放してくれなかったとき」、「だめといってもおもちゃを投げるなど、わざと悪いことをしたとき」という回答をしていた。

実習前に調べておけばよかったと反省することに関して、4名中2名は「特になし」としているが、あとの2人は「園児たちの好きなテレビ番組などの内容が全くわからなくて、とても困ったので、子どもの好きなテレビ番組などを知っておくべきだったと思った」、「3～5歳の子どもはどういうことができるかを調べておく必要があった」などを記述していた。

実習に参加して自分にプラスになったこととして、「参加する前は漠然としか、わかっていなかったこと

を知ることができた」、「子どものおもしろさが少しわかった気がする」、「子どもがより好きになった」、「子どもと話すときに、しゃがむようになった」などの記述があり、また全員が「実習前より強く保育者の道に進みたいと思った」と答えていた。大学生に行われた教育実習に対する調査（伊藤,1998）は、教育実習前には教職に就きたいと思っていたが教育実習後に非教職志向へと変化した学生が33.9%いたという報告があった。今回の実習に参加した高校生の4名とも保育者志向が高まっており、体験実習の本来の目的を得られることができたと言えよう。また、全員が今後体験実習があれば、参加したいと回答した。

IV 研究2：保育者の意識

1. 目的

保育者からみて、体験実習をどのようにとらえたかを明らかにする。

2. 方法

(1) 調査対象者

名古屋市内のK幼稚園の教諭12名（すべて女性）。調査回収数は9（75%）であった。

(2) 調査項目

- ・所属（担任クラス）（項目選択）
- ・担任クラスに体験実習の高校生が参加したか（項目選択）
- ・体験実習の高校生はどのような活動をしたか、またその際に何を伝えたか（項目選択および自由記述）
- ・体験実習の高校生に関して、印象に残っていることは何か（自由記述）
- ・体験実習を行ってよかったと思うことは何か（自由記述）
- ・もっと準備しておけばよかったと思われたことは何か（自由記述）
- ・体験実習の高校生や学校に事前に準備しておいてほしかったことは何か（自由記述）
- ・保育者養成校の学生の実習と高校生の体験実習で、異なる点は何か（自由記述）
- ・今後、このような体験実習があれば引き受けたいと思うか（自由記述）

(3) 調査方法

上記の調査項目の質問紙を作成し、配布した。その際、回答者を特定しないため無記名にし、さらに封筒に封をして園長に渡してもらうようにした。